『新実用漢語課本』（日本語版）を用いた教育の実践と課題

中　島　咲　子
神　田　千　冬

一．はじめに

私たちは 2011 年から 2016 年までの 6 年間，共立女子大学で北京語言大学出版の劉珣主編『新実用中国語課本』（日本語版）[1]を初級クラスで使い，2016 年度の初級では，このテキストを使用したクラスは 7 クラスあった。2017 年度はこのテキストが手に入らないような状況があり，使用しないので，一応の区切りとして，このテキストを使用した結果についてまとめてみることにした。このテキストの特徴・授業実践等を通してこのテキストのめざす中国語教育について考えてみたい。

但し，本稿の内容については筆者二人の担当したクラスのみでの授業体験に基づくものであり，このテキストを使用していた他の担当者の考えを反映しているわけではないことをはじめにお断りしておきたい。また，北京語言学院（現北京語言大学）が過去に出してきたテキストからこのテキストに到達した変化についても触れてみたいと思う。それは語言学院の教科書がおそらく日本の中国語教育の流れに一定の影響を与えてきていたと考えるからである。

（1）　このテキストの日本語名は『新実用中国語課本』であるが，この名称を使う人は少なく，中国語関係者の間では中国語名の『新実用漢語課本』と呼ばれているので，本稿でもこの名称を用いる。但し，英語版との区別のために（日本語版）を付記する。また，中国出版のテキストは原則として簡体字を用いた中国語名で示した。

二．中国で出版された教科書

本題に入る前に，戦後中国で出版された中国語テキストについて簡単にその流れを振り返っておこう。

最初に出版されたのは《**汉语教科书**》（1958 年 8 月，商務印書館）である。これは北京大

学外国留学生中国語文専修班によって外国人留学生向けに初めて編まれたものである。上下2冊で全72課，文法説明が中心で練習問題は少ない。後にロシア語・英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・日本語・インドネシア語・アラビア語等による訳本が出版されている[(1)]。

その後，『日本語版漢語教科書』が光生館（東京）から出版された。この日本語版は更に1969年に縮刷版の『合本中国語教科書』としてやはり光生館から出されている。筆者が1970年大学で初めて中国語を学んだときのテキストはこの『合本』だった。おそらく1970年ごろ日本の大学である程度使用されたものと思われる。

ここからは北京語言学院成立（1964）以後に出版された教科書の流れをたどってみたい。

次に出されたのは1972年2月の《**基础汉语**（上・下）》（商務印書館）である。これは日本でも注目され，1973年3月には東方書店から日本語版の『基礎中国語（上・下）』が出されている。《**汉语教科书**》よりはやや会話部分や練習が増えているが，やはり文法中心である。この《**基础汉语**》にみられる文法体系は動詞の補語の分類などその後の日本出版の中国語テキストの文法説明にかなり影響を与えていると思われる。

《**基础汉语**》の編者は文革中の出版のためはっきりしていないが，北京語言学院と思われる。

北京語言学院が次に編集したのが《**汉语课本**（全4冊）》（1977年1月　商務印書館）である。日本語版は『現代中国語』として1978年中華書店から出版されている。

このテキストには後のテキストにみられる「おきかえ練習」と会話練習が加わっている。「おきかえ練習」については後に詳しく述べるが，今回，とりあげた『新実用漢語課本』（日本語版）に至るまで少しずつ進化してきた会話を中心とする教授法がこの《**汉语课本**》で初めて登場している。ただ，このテキストは引き続いて《**基础汉语课本**》（1980）が出版されたため，あまり普及していない。また，このころは日本で作られる中国語教科書が増え，中国出版の教科書は分量が多いため，日本の大学の学期に合わないと敬遠されはじめていた。

《**基础汉语课本**》（北京語言学院編・外文出版社，1980）は全5冊（応用篇2冊を含む）で，詳しい文法説明や教授法を記した《**教师手册**》も付いている。日本語版の『新中国語1～5』（中華書店1982）も好評だったようだ。

しかし，1981年に北京語言学院編《**实用汉语课本**1，2》（商務印書館）が出ると，そちらに人気が集まった。理由は前半の課文の舞台を外国（おそらくカナダ）とし，語彙もいわゆる「教室，宿舎，図書館の三角形」から飛び出したものになっていたからである。文化大革命以後の社会の変化が感じられる。『実用漢語課本（日本語版）1，2』も東方書店から出て（1991），分量の多さにもかかわらず，1はかなり使われたようである。《**基础汉语课本**》同様，「おきかえ練習」「会話練習」など盛りこまれているが，文法になると説明が細かくなり，練習も文法問題がまだ多い。

文法重視の問題点を解決しようとしたと思われるのが2002年に北京語言大学出版社から

出た《**新实用汉语课本**》である。2009 年には北京語言大学出版社から日本語版が出版された。

北京語言学院出版の教科書のながれは以上のようであるが，『新実用漢語課本』は現在までのところその最新のものであり，またこの教科書がアメリカはじめ世界各国で広く使われているという事実も注目すべきである。たとえば「孔子学院教科書の品質向上に関する一考察」(2)によると「中国国家漢語国際推広領導弁公室は中国語教育を広めるために，北京語言大学と北京語言大学出版と協力し，『新実用漢語課本』を編纂・出版した。2002 年に出版されて以来，『新実用漢語課本』は世界中の中国語学習者と中国語教師に注目されている。（中略）それだけではなく，中国語教育分野では，『新実用漢語課本』はつねに研究テーマとして，分析されている。」のように紹介されており，このテキストの重要性を一面から示しているといえよう。

このテキストは日本語版初版が 2009 年 10 月である。もとは英語版であり，このテキストも説明部分の日本語は英語版（NEW PRACTICAL CHINESE READER ― 2002 年第 1 版）からの翻訳である(3)。しかし本書の日本語訳には非常にまちがいが多いという欠点があるが，ひとまずその日本語訳の問題をわきにおき，このテキストの内容について説明したい。

（1） 北京大学**对外汉语教育学院 “历史沿革”**
URL：http:/hanyu.pku.edu.cn/about/ShowArticle.asp?ArticleID=24

（2） 劉莉「孔子学院教科書の品質向上に関する一考察 ――『新実用漢語課本』と『中文聴話読写』の比較を中心に ――」（『東北大学大学院教育学研究科研究年報』65 巻 2 号，2017/6）p. 88

（3） 英語版は第 2 版が 2010 年 1 月に，第 3 版が 2015 年 10 月に出ている。日本語版は初版以外のものは出ていない。

三.『新実用漢語課本』（日本語版）の特徴について

このテキストは第 1 冊（入門級）～第 6 冊まで出版されているが，ここでは初級に使う『入門級』について説明する。一番大きな特徴は，第 1 課から第 6 課までが発音篇ということである。248 ページのうち 79 ページ分が発音である。これは週 2 回の授業のクラスではほぼ前期いっぱいにかかる。発音部分がこれだけ多いテキストはあまりないように思う。これは，初級の教科書はすべて発音の練習であるとも言えるので，他のどの教科書でも同じであるとも言えるかもしれないが，はっきり発音部分と銘打って別にしているということが重要であるように思う。このテキストの発音部分の 6 課まででも会話や短文，文法も入っているので，一見ほかの教科書と同じに見えるかもしれないが，細かく発音の内容を分けている点がちがうのである（「四．授業実践(1)」参照）。

このテキストの発音重視をよりはっきりさせるために，日本の大学等で使われているレベ

ルの高い，優秀な教科書を選び（これらは私たちが使ったことのあるものである），発音部分がその初級教科書の中で占める割合をページ数及び何課分かを調べてみた。

まず，日本で執筆され出版されたものをあげる。

A．全 274 ページのうち発音部分 27 ページで 9.8%。
　全 40 課のうち発音の課は 5 課で 12.5%。（以下書き方は同じ）
B．全 170 ページのうち 21 ページで 12.3%。
　全 40 課のうち 7 課で 17.5%。
C．全 109 ページのうち 17 ページで 15.5%。
　全 20 課で発音は別になっているので同じ 15.5%。
D．全 121 ページのうち 17 ページで 14%。
　全 21 課のうち発音は別なので同じ 14%。
E．全 116 ページのうち 10 ページで 8.6%。
　全 20 課のうち発音は別なので 8.6%。
F．全 318 ページのうち 26 ページで 8.1%。
　全 40 課のうち 5 課で 12.5%。
（A から F までは注(1)）

次に中国で執筆出版されたもの（英訳）と，その日本語訳で日本で出版されているものをあげる。

G．全 413 ページのうち 89 ページで 21.5%。
　全 42 課のうち 12 課で 28.5%。
H．全 302 ページのうち 49 ページで 16.2%。
　全 44 課のうち 12 課で 27.2%。
I．全 207 ページのうち 83 ページで 40%。
　全 24 課のうち 12 課で 50%。
J．全 294 ページのうち 75 ページで 25.5%。
　全 26 課のうち 10 課で 38.4%。
K．全 242 ページのうち 75 ページで 30.9%。
　全 14 課のうち 6 課で 42.8%。
L．全 492 ページのうち 106 ページで 21.5%。
　全 30 課のうち 12 課で 40%。
（G から L までは注(2)）

この次にくるのが今とりあげているテキストで，248 ページのうち 79 ページで 31.8%，14 課のうち 6 課で 42.8%となり，英語版（上記の K）と日本語版では当然のことながら割合は同じである。これはこのテキスト『新実用漢語課本』の前身である『実用漢語課本』（上記の L）の 21.5%，40%に比べても数値が高く，日本で執筆出版されている他の教科書とは更に大きな差のあることが明白である。

A～F でとりあげた日本出版の教科書は我々も使用したことのある優れた中国語テキストであり，発音部分にもそれぞれ工夫がこらされている。これらのテキストは発音部分以降でも発音を重視しながら使うこともできるだろう。しかし，私たちは発音部分の量の多さ，内容の豊富さはやはり『新実用漢語課本』の発音重視の表れであると考える。

この発音重視が意味するところは，中国語の初級において発音をマスターすることがいかに重要であるかということの表明である。中国語は簡単にいっても声調（四声）があるだけでも，発音が日本語や英語より難しいと言えるだろう。声調が正確でないために簡単なことばが相手の中国人に伝わらなかったというような経験は習い始めのころに多くの人の経験するところである。

この発音重視はこのテキストの第一の大きな特徴であるが，それでは文法を軽く扱っているかどうかという点をみてみたい。

このテキスト第 1 冊目 248 ページのうち文法部分は約 16 ページで，6.4%ということになる。これが多いか少ないかということは簡単には言えないのだが，その内容は直前の『実用漢語課本』とほぼ同じであるので，特に少ない割合ではないように思う。

またこの文法について一つ特徴をあげると，発音部分の第 1 課（9 ページ）に出てくる文法は「中国語の語順」というタイトルではじまっているということである。中国語の文法の説明としてはあたりまえのことではあるのだが，以下にその説明をみてみると「中国語の文法の最も大きな特徴といえば，人称・態・数・格などの面においては，形態の変化が存在しないところである。語順によって文法関係を表すため，語順は文法において非常に重要だといえよう。中国語の語順は，一般的に主語がまえ，述語が後ろという順番である。」と述べられている。

一般的にみて，日本出版の教科書で中国語の文法説明として語順を強調したものはあまり見ないようだ。このテキストが文法項目のトップにあげてその重要性を言っているのは注目すべき点であると思う。

これまで，『新実用漢語課本』（日本語版）の大きな特徴をあげてきたが，文法的にはほぼこれまでの語言学院出版の教科書の流れを受け継いでいるので，その全体の特徴について簡単に説明したい。語言学院出版のこれらの教科書はまず英語版ができたということは先に述べたが，英語版が先ということは英語圏を対象に作られているということを意味していると思われる。文法についても英語とどのようにちがうか，同じかが発想の基本にあるように思われる。たとえば一例をあげると，これらの教科書には命令形が存在しない。これは英語と

中国語の命令形の発想が同じであるため説明する必要がないと考えたからであろう。そのため，ごく簡単に“**你说**”あるいは“**说**”だけで命令形になる場合に，日本人の学生の中にはそれを「あなたは言う」「話す」としか受けとれない者がでてくる。なぜならテキストには命令形についての説明がないからである。日本語ではすべて語尾変化で表すため，ちがいが明確に説明されていないとわからない学生が出てくる。これは，説明がなくても前後関係から命令だと理解する学生も多いのだが，教科書としては不親切で，当然中国語の命令形はどういう形かという文法的説明がなくてはならないところである。これは他の一般中国人向けの簡単な文法の本の中には説明があるので[(3)]，英語圏の学生向けの教科書ではわざと省いていると考えられる。

更になぜかという詳しい分析はしていないが，語言学院系列のテキストは各種補語にさいている部分が非常に多く，初級から始まり，ずっと後ろの方までに相当多くの時間をさかねばならず，これも一つの特徴といえる。参考までに 1969 年出版の倉石武四郎先生の『ローマ字語法』（岩波書店）では，このテキストで説明しているような補語についての説明部分はあまり多くない。「動詞のあとに加えられる動詞」というような説明をしている。

上にあげた例は，語言学院の《**基础汉语**》系列の教科書の文法における傾向といってよいと思うが，それは一時期多く採用された『基礎中国語』や『新中国語』によって日本の教科書ではかなり広まっているのではないかと思う。命令形については参考書である相原茂ほか『WHY? にこたえるはじめての中国語の文法書』にはのっているが[(4)]，教科書の中にはのっていないものが多いように思う。それに対し，1969 年の『ローマ字語法』では第 33 課に「動詞の使い方補充」として出ているので以後のほかの教科書とはっきり違っている。

（1）
A　大石智良ほか『ポイント学習中国語初級』（改訂版）東方書店　2014
B　杉野元子・黄漢青『大学生のための初級中国語 40 回』白帝社　2012
C　上野恵司『**你问**我答』白帝社　2005
D　董燕・遠藤光暁『ともだち・朋友（トータル版）』朝日出版社 2009
E　上野恵司『標準中国語』白帝社 2005
F　相原茂・徐甲申『新編実用漢語課本』東方書店 2004
（2）
G　北京大学外国留学生中国語文専修班編《**汉语教科书**（上）》商務印書館　1963
H　『基礎中国語』（《**基础汉语**》日本語版第 1 冊）東方書店　1973
I　北京語言学院編『現代中国語』（《**汉语课本**》日本語版第 1 冊）中華書店　1979
J　北京語言学院編《**基础汉语课本 1**》（英語版）外文出版社　1979 年
K　《**新实用汉语课本**》（英語版）北京語言大学出版社　2002
L　『実用漢語課本 1』（日本語版）東方書店　1998
（3）　**邢福义**《**汉语语法三百问**》（商務印書館 2002）p. 13
（4）相原茂ほか『Why? 答えるはじめての中国語の文法書』（同学社 2002）p. 169

四.『新実用漢語課本（日本語版）』を用いた授業実践(1)

次にこのテキストを用いた授業のやり方について述べる。

受講生は原則として中国語未習者で，クラスの人数は 10 数人から 35 人前後とさまざまである。授業回数は週 2 回（前期 30 回，後期 30 回），教員は 1 人で 2 回とも担当する場合と 2 人がペアとなり 1 回ずつ担当する場合があった（中島は 1 人で週 2 回担当し，神田は他講師とペアで週 1 回担当した）。

まず，第 1 課～第 6 課の発音篇について述べると，この 6 課に前期 30 回，即ち夏休み前全てを費やした。これは一見無茶なようだが，このテキストは第 1 課から重要な文法が登場するし，バラエティに富んだ練習問題も多いので学生が発音ばかりという感想をもつことはないように作られていると思う。

各課の内容は①短い本文が 2 つとその新出単語・注釈，②発音の要領と練習（四声，声母，韻母，変調），③会話練習（重要文型，絵を見ての会話練習など），④文法，⑤総合練習からなっている。

発音について，一般のテキストでは韻母と声母を全部まとめて先に教える方法がとられていることが多いが，このテキストでは各課に声母と韻母が分散して出てくる。例えば，第 1 課では，

声母は b. p. m. n. l. h，韻母は a. o. e. i. u. ü. ao. en. ie. in. ing. uo

が出ている。第 1 課の本文はこの声母，韻母の範囲内の単語で構成され，発音を習っていない単語はほぼ出てこないようになっている。発音練習もこの課の声母・韻母を集中的に練習し，似た音の区別も徹底的に練習する。第 2 課では

声母は d. t. g. k. f，韻母は ei. ou. an. ang. eng. iao. iou

が加わる。このように課が進むごとに発音できる音が増えていく。この方式は《**基础汉语课本**》や《**实用汉语课本**》のときから採用されており，声母，韻母の出し方など北京語言学院時代からの研究と実践の成果が採り入れられていると思われる。

授業では冒頭に本文と新出単語が出てくるので順序どおり初めに CD を聞かせ，その後声母・韻母の発音のしかたを教えてから何回も読ませる。また，各種練習を繰り返して行う。本文については教師が注釈を利用して簡単に訳し，学生に訳させないという方法をとった。学生に訳させると学生はこのような中文日訳が重要なのだと勘違いして，これができれば中国語はできるようになると誤解する。本文はその課の語の環境を提示しているのにすぎないのでおおよその意味がわかればよい。一字一句日本語に訳すことはしない。したがって，文法の説明も簡単である。

1 課～6 課の文法の扱いについて，このテキストの『教師用参考書』では以下のように説明している。

はじめの6課では中国語の声母・韻母・4声及び変調をマスターし，語のピンイン規則を把握し，発音の基礎を固めることを主要目的とする。本文に出てくる文型や文法は軽く触れる程度にとどめ，系統的な説明や練習は行わない。意味がわかり，使えればよい[(1)]。

上記のように文法説明や注釈はごく要点にとどめ，余分な説明はない。このあたりも直前の『実用漢語課本』と異なり，発音に集中させる方針が貫かれている[(2)]。

最後に総合練習をやるが，この練習の半分はリスニング問題である。第1課からリスニング問題が設定されているのは今までの北京語言大学のテキストになかった特徴である。リスニング問題には①声母・韻母の聞き取り，②声調の聞き取り，③声調記号をつける問題(各10題)，④簡単な会話を聞いて内容について答える問題の4種がある。

一般にリスニングは単語力の向上によって強化されるので意味を伴わない音のみの聞き取りは無意味だという考え方もある。しかし，実際，ゼロの段階からこれをやらせると，個人差はあるが，学生の正答率は70%～80%に達する。神田も一緒にやってみたが，意味に頼る癖がついている神田より学生の方が純粋に音に集中している。音に敏感であることは「ことばは音である」ということを実感として体得でき，有意義であると思う。

このように半期，発音に集中した学生はおおむね正しい発音が身につくようだ。

中島は1人で2回担当したので，時間配分が自由で，前述のように本文はごく簡単に意味を伝え，練習重視で進めたが，学生がすぐ覚えてしまうので別に簡単な聞き取りの練習問題を用意し，毎回その聞き取りテストに多くの時間を割いた。その結果，前期終了時，学生の発音及び聞き取りの成績は一般に非常によく，ほぼ90%近くの学生が85点以上の成績だった。

発音篇でもう一つ言及しておきたいのはこのテキスト付属のCD（別売）である。このCDは教学用として非常にすぐれている。教学用のCDは単に発音が標準的できれいであるだけでなく，基礎を教えるための正確で，しかも自然な発音が要求される。北京語言大学には朗読の専門家から録音スタッフまで揃えた専門部門があり，学生がまねるのに最適なCDが作られている。発音重視の授業を受ける中で学生たちの多くはこちらから言わなくてもCDを購入し，自宅学習に活用していたようだ。

（1）『新実用漢語課本　教師用参考書』p.2 原文は中国語，訳は筆者。

（2）『新実用漢語課本』では第1課の文法に前述のように中国語における語順の重要性が述べられているが，その後に例文が以下のように表として載っているだけである（p.10）。

主語	述語
你	好。
我	很好。
力波	也很好。

一方，『実用漢語課本』では，ほぼこれと同じ 3 つの例文を載せているが，その後に“**你，我**”が主語，“**好**”が述語，副詞の“**很**”は状語で述語の“**好**”を修飾しているという内容の説明が続いている（p. 15）。

五.『新実用漢語課本』（日本語版）を用いた授業実践(2)

次に 7 課以降の授業について述べる。1〜6 課までの発音段階をおわると内容が急にふえる。はじめに会話の本文が 7 課でもかなりの長さのものが二つあり，そのあとにキーポイントとして重要文型があり，漢字だけで読む練習がつづき，練習問題が大量にあり，さらに「閲読と復唱」という短文があり，これもピンインのついていない漢字だけの文である。そして最後に 3 ページ半位の総合練習がある。

このように量がふえてくると全部をはじめからおわりまで流していくか，どこかに重点をきめるかで時間の配分が変わってくる。7 課以降は各教師の考え方でいろいろちがう使い方ができるように思った。中島の場合は基本的に 6 課までと同じで，発音とききとりを重点にした。本文は CD をきかせ，また一緒に読むことをくりかえし，意味は教師が説明する。うしろの注を使って説明することが多いが，中文日訳にならないように大体の意味がわかればよいという形ですすめた。これはこの『新実用漢語課本』の『教師用参考書』の 7 課の本文についての説明で，実物などを使って説明し，口で練習するということに重点がおかれており，学生の母国語を使っての説明をしないことが前提としてあることがわかる。日本での授業であるので，教師は当然日本語を使って説明しているが，中文日訳式に日本語を重視するやり方はしないことにしていた。

先にあげた練習問題の中では最初に出てくる“句型替換”（おきかえ練習）と総合練習の前におかれていた「閲読と復唱」に多くの時間をさいていたので，この二つについて以下に説明する。

「おきかえ練習」は《**基础汉语课本**》（日本語新版『新中国語』）から《**实用汉语课本**》《**新实用汉语课本**》へと続く語言学院の中国語教科書すべてに共通する定番の練習問題であるが，語言学院教科書の影響をある程度うけていると思われる日本の中国語教科書にはほとんどみあたらない[(1)]。全部の日本執筆出版の教科書を調べたわけではないので断言はできないが，日本では重視されていない練習問題である。また語言学院の上述の教科書を使っているところでもこのおきかえ練習が授業の中で重視されていない例が多い。

このおきかえ練習は最初の《**基础汉语课本**》《**实用汉语课本**》でも，現在の《**新实用汉语课本**》でも進化し続けており，教科書の中の重要な部分を占めている。この昔から現在への流れをみるとだんだん簡略化されてわかりやすくなっている。

そのうつりかわりの傾向を少しみるとそれはおきかえ単語の数を少なくして，また内容的にも多くのことを言わないような練習の簡略化にすすんでいると思う。それぞれの教科書の

文法構成の順序が同じではないので，まったく同じ内容の例をあげるのは難しいが，比較的近いものを例としてあげると：

① 『実用漢語課本』（日本語版）p. 272

这本画报好吗？

很好。

那本画报更好，你看看。

啤酒（瓶）	喝
歌儿（个）	唱
词典（本）	用
唱片（张）	听
大衣（件）	穿

② 『新実用漢語課本』（日本語版）p. 146

A **他送他朋友什么？**

B **他送他朋友一张光盘。**

A **这张光盘怎么样？**

B **这张光盘很贵。**

一个大蛋糕	漂亮
一瓶葡萄酒	便宜
一本书	有意思

このように①ではおきかえなければならないことばが3つあるが，②では数量詞と名詞をひとつにまとめたため，おきかえる語は2つになっており，おきかえるものの数を多くしないという傾向が随所にみられる。

それはおきかえ練習がそれによって多くの単語や言い方をおぼえるためにあるのではなく，簡単な文型の順序に従って単語をおきかえれば，それを口に出してくりかえすことによって一定の言い方が自然に口をついて出るようにするための練習であるからだ。それはこの『新実用漢語課本』になると簡略化がよりすすんでいると思う。授業ではこの「おきかえ練習」に多くの時間をさいた。また「閲読と復唱」を一緒にくり返し読み，意味を簡単に説明したあと，全文ではなく，きりのよいまとまりで半分なり四分の三なりを宿題として暗記してもらい，次回に小テストの形で一人一人に発表してもらった。

授業の重要点は以上であるが，その結果についていうと，たとえばピンインのついていない漢字が読めるかとか文法問題がとけるかという点では個人差が大きく，一概にどのレベル

とは言えなかった，ただききとりと発音に関しては前期（1〜6 課）と同じく優秀な成績だった。

（1） 董燕・遠藤光暁『ともだち・朋友（トータル版）』（朝日出版社 2009）には“**替换练习**”（おきかえ練習）がとり入れられている。

六．おわりに

以上述べてきたようにこの相当厚い教科書を 1 年間初級で使う場合，かなりいろいろな使い方ができるのだが，私たちは発音，ききとりを重視した方向で使い，その点ではそれなりの成果はあったと思っている。だが，大学生向けの中国語教科書が一年間で中国語の主な文法項目を全部教えてしまうというタイプが多い中では，この『新実用漢語課本』は全く役に立たないと思われそうであるが，中国語の初級では何が大事かということを改めて訴えたいと思う。発音とききとりに自信がない学生は中・上級に進んだ時，日本人講師の文法や講読のクラスを好み，中国人講師の会話クラスを敬遠する傾向が見られる。これではいつになっても中国語によるコミュニケーションはおぼつかない。反対に発音・ききとりに自信があれば，中国での短期語学研修にも適応しやすいので中国語に対するモチベーションも上がる。

また，発音とききとりにすぐれた学生はさしあたり HSK（漢語水平考試）の初級中級レベルをこわがらないだろう。この HSK は今世界標準の中国語テストとしてだんだん日本でも知られつつあるが，一般には HSK は中国が国家的にやっているものという程度の認識だと思う。が，HSK は北京語言学院（現北京語言大学）が作り，行ってきたものであり，HSK の中国語体系は北京語言学院の中国語体系であり，つまり北京語言学院が長年行ってきた対外中国語教育の集大成なのである。1990 年に HSK は中国国家標準の試験となっており，北京語言学院が HSK の生みの親であり，主催団体であるというのは周知の事柄である[(1)]。

ということはこの「新実用漢語課本」は現在のところでは HSK 向きにできているテキストということができるだろう。

ことばを発信する方法としての中国語にするために中国語教育をどう改革していくかがこれからの課題であると思う。

以上は私たちの実践報告である。先学諸兄のご批判・ご教示をお願いしたい。

（1） **国家汉语水平考试委员会办公室编《汉语水平考试大纲（初 / 中等）》**（現代出版社　1996）の p. 1 には“**中国汉语水平考试**（HSK）**介绍**”として以下のように記されている。「　」内は筆者による訳文。

中国汉语水平考试（HSK）**是测量母语非汉语者（包括外国人，华侨和中国国内少数民族学员）的汉语水平而设立的国家级标准化考试。汉语水平考试**（HSK）**是由北京语言文化大学**

汉语水平考试中心设计研制的，于 1990 年 2 月通过专家鉴定的。

「中国の HSK は母語が中国語でない者（外国人，華僑，中国国内の少数民族の学生を含む）の中国語レベルを判定するために設けられた国家レベルの標準化試験である。HSK は北京語言文化大学（現北京語言大学）HSK センターが研究考案してきたもので 1990 年 2 月専門家による検定を通過した。」

また，初・中等レベルに続き，高等レベルの HSK も**国家汉语水平考试委员会办公室编《中国汉语水平考试大纲》〔高等〕**（北京語言学院出版社　1996）によると「1993 年 7 月専門家に認定され，同年正式に国内外に広められた。」（p. 1）とある。

参考文献

①劉莉「孔子学院教科書の品質向上に関する一考察 ──『新実用漢語課本』と『中文聴話読写』の比較を中心に ──」（『東北大学大学院教育学研究科研究年報』65-2）2017

②**国家汉语水平考试委员会办公室编《汉语水平考试大纲（初 / 中等）》**　現代出版社

③**国家汉语水平考试委员会办公室编《中国汉语水平考试大纲》〔高等〕**　北京語言学院出版社　1996

④**邢福义《汉语语法三百问》**　商務印書館　2002

An Analysis of *A New Practical Chinese Reader (Japan Edition)* and Chinese Language Pedagogy in Japan

Sakuko Nakajima
Chifuyu Kanda

A New Practical Chinese Reader (Japan Edition) was published in 2009. It is the most recent in the Chinese language textbook series produced by Beijing Language and Culture University. This paper describes the characteristics of Chinese textbooks published by Beijing Language and Culture University and analyses the influence the books have had on Chinese language education in Japan. It also describes problems in Chinese language pedagogy in Japan from the perspective of this textbook.